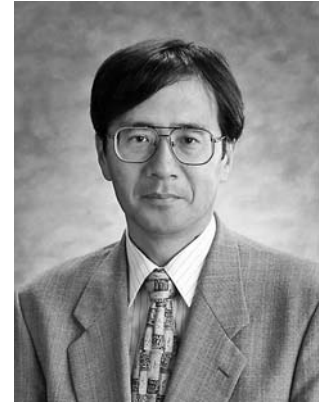


四国経済発展の道標

四国経済連合会参与(日本銀行高松支店長)

渡辺 賢一郎



遍路道を歩いていると、所々で路傍にひっそりと佇む道標地蔵に目がとまる。険しい山道を登って峠に辿り着いた時に、お地蔵さんの穏やかな顔を拝むと、それまでの疲れがすっと癒されるような気がする。先人たちが残した遍路道の象徴とも言える道標地蔵は、何百年もの間、数多くのお遍路さんを見守り、道案内の役割を果たしてきた。さて、現代の道標地蔵は、四国経済が持続的に発展していくために歩むべき道について、どのような方向を指し示しているのだろうか。

100年に1度とも形容される景気後退は、漸く最悪期を脱しつつあるものの、不況の発端となった世界的な金融危機の規模とその複雑さ故に、まだ明確な景気回復シナリオが見えていない。しかし、四国の企業経営者や様々な分野のリーダーの方々とお話をすると、この危機を契機として、各企業の持つ強み、そして四国が持つ価値ある地域資源（技術、人材、自然環境、文化など）を結集して、企業力、地域力を磨いていこうという機運が盛り上がっているのを感じる。

不況と言っても、全ての分野が落ち込んでいるわけではない。農業、医療・介護、環境、新エネルギー、観光産業など長期的に需要拡大が見込まれる分野も数多くあり、これらは、いずれも大都市圏よりも地方圏にこそ比較優位があ

る。実際にこうした産業分野では、世の中の流れを先取りしながら、独自の技術を活かす四国発のビジネスも胎動し始めている。高齢化社会のニーズを睨んでモバイル端末による訪問看護サポートシステムを開発する会社、中山間地域の農家をターゲットに、綿製の不織布を使った水稲直播栽培で稲作の省力化を提案する会社、資源の有効利用や環境配慮の視点から竹綿製品の製造装置開発に取り組む会社、家畜飼料の品質改良を進めながら酪農村の振興に貢献する会社、などなど。

こうしたイノベーションは、潜在的な成長力を持つ産業の生産性向上に寄与すると同時に、そこで働く人々の労働環境を改善し人材を引付けることにも貢献する。さらに、政府の規制緩和や「賢明な財政支出」が、こうした民間企業のダイナミズムをうまく補完すれば、経済の付加価値創出力が飛躍的に高まっていくことが期待される。そして、その先には、都市圏と地方圏のバランスのとれた質の高い景気回復という展望も見えてくるのではないだろうか。人口減少・高齢化という大きな構造変化に直面する四国経済が、地域資源を活用して新たな成長のフロンティアを切り開いていけるかどうか、今、大きな岐路に立っている。私たちは、将来世代のためにも、知恵を絞って、しっかりとした道標を築かなければならない。